
『真実の声を聞き届け！』

蓮華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『真実の声を聞き届け！』

【Zマーク】

Z2191S

【作者名】

蓮華

【あらすじ】

少年陰陽師の現代パラレルで昌浩転生ものです。元は以前やつて
いたHPで作つたやつです。途中から作り変えていますが・・(・・・
・・)

あらすじ……。

平成の世昌浩の生まれ変わりが転生してくると聞いた神将が一同に
決した。そこで見た赤子はなんと双子だった！

だが、一人の内一人は『昌浩』の生まれ変わり。

紅蓮に引き合わせてみると二人とも泣かないが双子の内一人から『昌浩』の靈力を感じる。そちらを『昌浩』だと決定したが、実はもう片方の赤子が『昌浩』だった・・・そして二人は成長し・・・。

待ち望んだ命

――ずっと待っていた・・・

――約束は果たされる・・・

平成の世 ある一家に嬰児が誕生した。

—おぎやあおぎやあ—

家中に元気な嬰児の泣き声が木靈した。

家のある一室に集つた者達がいた。

そこに集つた十二人の存在がいた。

彼らは均等性がなつた。現代で言つ小学生ぐらいの子供の姿もいれば青年、壮年、そして老人といつバラバラだった・・・そう姿だけを見ればの話だが。

彼らは共通しているのは彼らは人間ではない、神の末端と呼べるものの達という事だ。

末端とはいえ神に分類される彼らが一同顔を揃えて下界に降りてくる事は滅多に無い。

あつたとしてもそれは彼ら個人の考へで単身で姿を現すかもしくは彼らを

式神として下している主の呼びかけにのみ一同は姿を現す。

そして今回もそれと同じように彼らの主である人間の呼びかけに姿を現したのだ。

そしてその主は彼らを呼び出し、彼らをこの部屋で待機するよう言葉を残し部屋を去つた。

彼らに衝撃な一言を残して……。

——『暁が生まれてくる……』と……。

待望んだ命（後書き）

始めまして。この小説をよんでもくれてあるがとびいりありがとうございます。

あらすじでも書きましたが、こては以前やっていたサイトの小説を元につくったモノです。途中で変わっていることもあります

が、長く付き合っていただけだと嬉しいです！

アメブロでも同時進行でやつしていくつもりですが、アメブロをやつしている方がいらっしゃるならそちらも見て貰えると嬉しいです（＾＾）どちらかを先に更新するかわからないので（笑）

よろしくお願ひします！

安倍晴人

彼等の心は弾んでいた。

当然だ。昌浩が無くなつてから何十年、何百年の間ずっと待ち続けてそして願つていたのだ。

喜ぶなというほつが無理な話だ。

そして、もうすぐその存在を感じることができるのだ。

しばらくしてガチャという音とともに彼等の待ち人がやつと姿を現した。

平安の世で『安倍晴明』であり、そしてまた今世の彼等の主である安倍晴人だ。

「つー晴人つー！」

晴人が部屋に入ってきたらとたん一人の青年が声を張り上げた。

彼は驚恐を司る十二神将。最強にして最凶の闘将、煉獄の将・騰蛇とうじやといい、身長186cmと十二神将の中で一番の長身で精悍な顔つ

きに、黒とも見紛う深い紅の髪と切れ長の黄金の双眸をもつ。褐色の肌で、一切の無駄のない逞しい体躯をしていた。

「紅蓮・・・」

紅蓮。という名はその身に纏う焰はあらゆるものを灰すら残さず無に帰す甚大苛烈な焰ゆえに地獄の業火と忌み嫌われていたのを『発する炎が水面に咲き誇る紅の蓮のようだ』と晴明が彼に『えた名だ。

部屋に入ってきた晴人は心配そうな紅蓮を見、そして周りを見ると他のもの達も似たりよつたりの顔をしている。

「晴人・・・昌浩はつ！？」

それに晴人はうれしそうに答えた。

「ああ・・・無事に生まれたよ」

ホツと彼等は安堵の息をついた。

そんな彼等に晴人はフツと微笑む。

(昌浩・・・お前は彼等とつまくやつていたよつだな・・・)

「晴人、それで昌浩は?」

勾陳が聞いた。

十二神将の一人で士将であり紅蓮（騰蛇）と同じく凶将で、四鬪将の一人で最強である騰蛇に次ぐ通力の持ち主。身長165cm、肩に付かない位置で切りそろえた漆黒の髪に濡れたような黒曜の瞳を持つ女性である。

「ああ・・・こっちだ」

晴人は勾陳に答え促すかのように部屋を出た。

そんな晴人に彼等は黙つて付いていくのだった。

安倍晴人（後書き）

ありがとうございました！！

双子

「・・・ここだ」

晴人に案内されて着いた部屋を入つた彼等は驚いた。

確かにそこには赤ん坊がいた。だが・・・

「え、二人・・・？」

思わず呟やいた太陰の言葉はその場にいた晴人以外全員の思いだろう。

「ああ・・」

晴人は嬉しそうに笑つた。

「双子……か」

勾陳が納得したように頷いた。

平安の世では忌み嫌われていた双子。だが今は平成の世。昔どちがい忌み嫌われる事もない存在。

「え……じゃあ昌浩は？」

「太陰、よく見てみろ」

「え？ ……あ……」

そう玄武に言われて太陰が赤ん坊を見るとあることに気付きはつと
した。

「これって……僅かだけど昌浩の靈氣？でも一人とも靈力はある
わ」

その気を纏っていたのは安らかに眠っている一人のうち右側で眠っている子。

確かに二人とも靈力は纏っている。だが太陰の言葉通り右側の子には昌浩の氣を感じた。

「・・・紅蓮」

晴人に呼ばれ赤子 w 凝視していた紅蓮は顔を上げて晴人を見る。

晴人は促すように頷く。

紅蓮はそれにゅっくりと頷き赤ん坊に近づこうと足を踏み出した。

ゆっくりと赤ん坊の方に進む紅蓮を晴人と神将は固唾を飲んで見守つた。

紅蓮が一人の赤ん坊に近づくと左に寝かされている赤ん坊がピクリと指を動かした。

それは畠浩の靈氣を僅かに感じた方とはちがつ赤ん坊だった。

「え・・・」

もしかしたら、泣くのでは・・・と紅蓮はぎくりとした。

双子（後書き）

ありがとうございました！！

泣かない赤子

紅蓮は赤ん坊のすぐ傍で足を止めた。

赤ん坊は敏感だ。普通の赤ん坊なら紅蓮が持つ苛烈な神氣に怯え泣き出す。

そして最後には熱が出てぐつたりとなってしまつ。

だがそれは、昌浩以外の話だ……。

「…………え。泣かない？」

泣かないのだ……。それも一人とも。

「そんなまさか……」

今までになかったことだ……平安の世でも平成の世でもこの長い年月の中で紅蓮の神氣に怯え泣き出さなかつた赤ん坊など晴明（晴人）かもしくは生前の昌浩にしかありえなかつた事だ。

紅蓮は呆然と目の前の赤ん坊を見つめた。

自分の神氣に怯えない人間が一人以外いるのが信じられないと顔をして。

晴人は紅蓮のその様子を見ながらも内心驚愕していた。

晴人にとっては紅蓮の神氣に怯えない子が現れる事は嬉しいことだ。

それは紅蓮の大切な存在となりうる事だから。

「晴人・・」

玄武はそんな晴人を見る。

「ほお、これはうれしい展開だな・・・。まさか昌秋が泣かないとは・・・」

「昌秋？・・・子の名か？」

勾陳が晴人に聞く。

「ああ、そうだよ。昌浩の今生の名は『浩秋』 それでもう一人の子
が『昌秋』だ」

晴人はやさしく二人の赤ん坊の頭を撫でながら言った。

紅蓮は内心驚愕をしているがそれを落ち着かせてそつと浩秋を抱き
上げる。

その存在を確認するかのように・・・。

「浩秋・・」

晴人はそんな彼に微笑み昌秋を抱き上げ紅蓮に見せた。

「紅蓮・・

紅蓮は晴人に抱き上げられている赤ん坊・・否『昌秋』の柔らかい頬にそつと指を伸ばした。

その鋭い爪があたりない様に細心の注意をしながら。

「あ・、あ・、あ・、あ・、

その指を赤ん坊は無邪気な笑みを向ける昌秋のその小さな手が掴んだ。

「つー・・・まさ・・・・あ・・・せ

「あ・、あ・、あ・、あ・、

昌秋は紅蓮に向けて無邪気に笑つたのだった。

やつと会えたね。

この時をずっと待ち望んでいたよ。

昌浩、ずっとお前を待つていた。

長い長い時の中で、この時だけを待ち望んでいた・・・。

泣かない赤子（後書き）

ありがとうございました！

傍にいるなら向むきも望まない・・

「こいつてきまーす」

「こいつてきまーす」

声をかけて玄関から出た二人… 昌秋と浩秋だ。

ちなみに前者が昌秋で後者が浩秋だ。

あれから・・・13年。何事もなく平和に過ぎた。

安倍家に初めて生まれた双子達13歳になり中学生になり何事もなく過ぎた・・・そう何事もなく・・・。

二人。否、足元にいるのは平安の世『安倍昌浩』の相棒であり、ずっと歩いていた。

そり、足元にいるのは平安の世『安倍昌浩』の相棒であり、ずっと共に行動していた昌浩命名『物の怪のもつくん』である。

「あつー。」

学校に向かつて歩いてくると浩秋は思に出したよつて声を出した。

「どうしたんだ？」

昌秋と物の怪が急に声を上げた浩秋を振り向き、物の怪は不思議そうに聞いた。

「俺、今日日直だった・・・」

あははと苦笑いをしながら言ひ浩秋に物の怪はため息をついた。

「じつかりしてくれよ。晴明の・・・いや、晴人の孫！！」

ため息をつきながら呆れたように言つ物の怪にムッとする浩秋

「なんだよ、それ。そんなの今関係ないだろ」

「いや、そんな事ないぞ？あいつならな・・・」

「い」めん。昌秋、俺先に行くな

「あ、うん。わかった」

物の怪が何か言つているのを無視して浩秋はさつと一言残し、走り去っていく。

昌秋は目をつぶりながら、晴人なりこのときどうするかなど熱弁をしている物の怪を見た。

・・・忘れ去られて、といふか置いてきぼりをへりつてゐる物の怪
を・・・。

「・・・もっくん

「ん?」

思わず声をかけた昌秋に物の怪は自分が置いてきぼりにあれた事す
ら気付かず足元から昌秋を見上げた。

昌秋は物の怪のその姿に懐かしそうに瞳を細めたが、フッと目をそ
らして浩秋が走つていつたほうを指差した。

「・・・浩秋、もういつたけど・・・いいのか?」

それにギョッと物の怪は近くに浩秋がないことに気付くと昌秋が
指したほうを見る。

そこには走つていく浩秋の姿・・・。

「ひら―――！浩秋！おいていくな！・・・じゃ あなた冒秋氣をつかでこよー！」

そう叫ぶと走つてゐる浩秋を追いかけようと走り出す物の怪。

「うさ」

バイバイと手を振る冒秋に背を向けて走つていつた。

おいでいかれまこと浩秋に元に追いつく物の怪。

「ひら！浩秋、人の話はちやんときなつて昔からこつてゐるだらうが
一」

浩秋は走りながら、言ひ物の怪に答える。

「なにいつてんのもつくん。もつくんは人じゃないし、第一今は俺すつしく急いでるの！そんな話なんて聞いてられりってー！」

その浩秋の答えに物の怪は涙を拭うふつをする。

それを走りながらしているのだからなんとも器用である。

「ハハハ。俺は悲しいよ浩秋。。。俺はそんな子にお前を育てた覚えはないぞつーーー！」

「俺だつてもつくんに育てられた覚えはないつて、本当にこんな事している場合じやないつて、遅刻するーーー！」

走りながらもそんな会話が昌秋のところまで聞こえてくる。

昌秋はそんな彼等の会話をどこかぼんやりしたまま聞きながら歩いていた。

そして、寂しそうに悲しそうに笑つた。

そう・・あの時のまま『昌浩』の生まれ変わりは浩秋とされた。

本当の『昌浩』の生まれ変わりは昌秋にもかかわらずだ。

それは仕方が無いといえば仕方が無いことだった。生まれてくる時『昌浩』の氣を多く纏っていたのは浩秋だったのだから。

だけど・・それでも・・・。

「ひーもっくん・・・・・・紅蓮つーー」

昌秋はそう咳きぐつと耐えるように口をギュウッとつぶつた。その声はもう届くことはないのかも知れないけど、

どうか伝わってほしいと心の叫びを上げていた。そしてその声はすぐ苦しい声だった・・・。

ただ、傍に入れるなら、何も望まない・・・。

傍にいのなり向むかひも望まない・・（後書き）

本編に入りました！－！ありがとうございます！－！

声

――・・・紅蓮つ・・・――

物の怪のもっくん事十一神将騰蛇、基紅蓮はふと聞こえてきた声に足を止めた。

「あれ？・・・もっくん？」

走っていた浩秋は突然隣にいた物の怪の姿が見えなくなり振り返る物の怪が立ち止まっているのを見つけた。

浩秋はそこには物の怪が後ろを振り返ったまま固まっている物の怪に怪訝に思い、物の怪が見ている方を見るが、そこには何もなく普段の光景が広がっているだけだった。

「? ?」

(どうしたんだろうもっくん?)

一方、物の怪は先ほど聞こえてきた声に後ろを振り返つたまま呆然と固まつていた。

「そんな・まさか。いやいやそんな筈は・」

「い・まの声は・・氣配は・・まさ・・か、否、そんなはずはない。暁浩の生まれ変わりはここにいる浩秋だ。」

そんな筈はない・・。

「・・お～い。もつくん?」

「おわつー?」

ひょいと考へ込んでいた物の怪は突然浩秋に抱きかかえられて驚きの声を上げて目の前の見慣れた顔に視線をやつた。

「・・？浩秋？？」

「浩秋？じゃないよもっくん！俺は急いでるのー。いつまでもやつしていろなら俺先に行くからね？」

「あ、ああ、悪い」

物の怪は浩秋に抱えられながら、バツの悪そつな顔で答えた。

「つたくもつ」

浩秋はそんな物の怪を下ろすと走っていった。

物の怪は浩秋の後姿を見て、そして今一度後ろを振り返った。

「…………まさか、な。」

物の怪は自分の中の疑問に氣のせいだと首をふり浩秋を追いかけて走つていったのだった。

声（後書き）

ありがとうございました！

彰菜と彼等の日常

放課後。

授業終了のチャイムが鳴り響いた。

HRが終了して昌秋が帰る準備をしていると教室の扉が開いた。

「昌秋、浩秋、帰りましょ~?」

教室に入ってきたのは黒髪の長い少女。彼女の名は藤原彰菜、年は昌秋達と同じ年で祖父の晴人の知り合いの娘で昔からよく遊んだ、いわばで二人の幼馴染だ。

そして、平安の世の『藤原彰子』の生まれ変わりだ。彼女にもちらん記憶はない。だが、前世と同じように視鬼の才は健在のようで物の怪の姿もばつちりと見えている。

このことを知っているのは晴人と昌秋と十二神将のみだ。

「うふ。ありがとう。わざわざ迎えに来てくれて」

昌秋が嬉しそうに笑つた。

「おひ、彰菜、いつも悪いな」

物の怪が言つ。

「ううん。気にしないで。私が一人と一緒に帰りたくてしてるので
から」

ふわっと笑つて首を振る彰菜にありがとう。と昌秋はもう一度いう。
余談だがこの彰菜の優しい微笑みがいい！とクラスの男子に人気で
ある。

「悪い、おまたせ！」

浩秋は鞄に急いで荷物を詰め込み立ち上がった。

彰菜はそれにニヒリと笑つた。

「じゃあ行きましょ、ひ

彰菜はいつも放課後になると教室に入ってきて、三人、否、三人と一緒に帰るのだ。

これが彼等の日常の風景である。

彰菜と彼等の日常（後書き）

あつがといひやこました。

その日の夜家族が皆、寝静まつた頃、昌秋はベットからゆりくり起き上がつた。

時計を見ると夜中の1時を示していた。

「さて、と・・・

電気を緩くつけて、クローゼットの奥からフード付きの外套がいとうをとり出し服の上かた着る。

さらば、クローゼットの奥に置いている箱の中から予備の靴を取り出した。

そして電気を再び消してフードを被つて窓際によつて靴を履くと窓を開ける。

昌秋の部屋は一階にあるが、窓を開けると少し離れたところには大きな木があつてそこから外に出れるのだ。

元々、『安倍家』は裏の世界で有名な平安の世から続く陰陽師の家計。今はほとんど忘れ去られていて普通の生活を送っているが、先

祖代々のこの家は結構でかい。平安時代、『畠浩』たちが住んでいた屋敷を建て替えたのが現在住んでいる家だ。

引越しを考えた事もあつたらしげ、こじには『安倍』家がずっと守つて気きた家であつたし、邸の真下が龍脈の合流点であつた事でそう簡単に出来ることはできないと結論つけて立て替えてこれまで通り住むことにしたのだ。

そのため『畠浩』であつた昌秋にとつて、こじには昔からの馴染みの場所でもあつたし幼き頃からいるのだとじやつたら外に出れるのかなどは容易にわかつた。

昌秋は外の気配を探り神将や人の気配が近くにないのを確認に窓から木に飛び移つた。

昌秋がこじやつて夜中に家を抜け出すのは今回が初めてではない。

毎日とはいかないが、3日に一回はこじやつて夜警をしている。平安の時の用に今はもう

妖があちこちに跋扈しているよつた事はないが、たまに妖はいるし、なにより昔からずつとしている夜警は

生まれ変わったとはい記憶のある昌秋だ。そう簡単にその癖みたいなものは抜けないものだ。

それに念のためだ。

スタッフと木から外に出てズレ落ちかけたフードを再度深く被り直し気配を消してその場をゆっくり歩いていく冒秋の姿は誰にも見られることはなかった。

そこには静かな夜の気配が流れていった。

夜警（後書き）

ありがとうございました！！

助けを求める声

昌秋が夜警をしながら歩いているとやはり夜中なだけあって殆ど人は見当たらない。

いたとしても一人が一人でその人たちも疲れた顔をして歩いているサラリーマンぐらいいだ。

その人たちも昌秋が気配を消して歩いているため昌秋に気付くことなく歩いていく。

もし気付いていたら、昌秋の姿を見て不審者としてつかまりそうだ。

何故なら昌秋の今の格好は黒い外套を被っているのだから。

平安の世は夜になつたら真つ暗闇となるが今は昔とちがい夜でも外には電気がついているためそんな姿の人物を見たら怪しさ満天だろう。

気配を消しているしできるだけ電気のあたらない場所を走り回るため気付かれることもないが・・・。

ー異常はない・・・か。

・・・・ま、あつても困るけど・・・。

昌秋がゆっくりと歩いていると、内本町に誰もいなくなっていた。

二つの間にか隣町まで来ていたようだ。

「・・・ふう」

一とつあえず「」の辺りを一周してから帰るか・・。

やつ歩きながら考えている昌秋。

「・・・」

昌秋は歩いてくると、どこからか声が聞こえた気がした。

「ん?・・?」

足を止めて周りを見回すが特に変わった事もない・・。

「・・・お・・・だ・・・ま」

氣のせいかと思つた昌秋だつたが耳を澄ますとやはりどこからか声が聞こえてきた。

その声と同時に妖氣を感じた昌秋は急いで声が聞こえた方に足を進めた。

「…」

昌秋が声と妖氣がする方に走つていくと一つの公園が見えてきた。
そこに急いで入つていくと先ほどよりも声がはっきり聞こえた。

「俺達を食つても・・つまくないって！－！俺達弱い雑鬼なんだから
・・・」

昌秋は「」の声をどこかで聞いた事があるような気がした。

「くわお・・・」んな時孫がいてくれたらな～

「　「　「　孫へーー..」」

聞こ覚えのある声に聞こ覚えのありすせる言葉・・・。

「」の声は・・・まさか！

昌秋がその声の元に駆けつけるとそこには昌秋の予想通り見覚えのある顔ぶれがあった。

「おまつー..」

その知った姿に思わず声を上げそうになるが、そこからしつれていない場所にいた妖に

まずはこいつをなんとかしなければ、と踏みどりました。

その妖は猿の妖だった。だがその口から出でている犬歯はよつた歯は鋭く、その爪も尖つっていて鋭い。

飢えているのかその目は赤く血走っていた。今にも雑鬼達を食べてしまいそうな勢いだ。

昌秋は急いで雑鬼の傍に走り寄った。

助けを求める声（後書き）

ありがとうございました。

誤字指摘・感想ありがとうございます。

励みになりますっ！！

誤字修正しました。

雑鬼ズ

昌秋は怯えて固まっている雑鬼達の田の前に立ちはだかると田の前の妖に対峙した。

「 「 「 「 なつ！？」 「 」 」

突如目の前にやってきた人間に雑鬼達は驚きの声を上げた。

「 お、 おい！？」

ーーぐワアアアアアアア

雑鬼達の声に答えている余裕もなく、 目の前の妖が大きな声を上げながら襲い掛かってきた。

昌秋は咄嗟に障壁を築く。

「禁ーー！」

妖は予想外の術に跳ね返されてドンッと公園の砂場の地面に叩きつけられた。

勢いよく叩きつけられたためその勢いで砂場の砂が周囲に宙に浮いて散らばった。

「今ひとつ・・・

「・・・陰陽術だよな？」

「ああ・・・暁、晴明や孫が使っていたやつだ・・・」

「つて事は陰陽師！？」

雑鬼は呆然と目の前に怒っている事を見ていた。

グルグルグル・・・！と地面に倒された妖は起き上ると昌秋に向けて威嚇をする。

完全に妖の狙いは雑鬼から昌秋に変わった。

その様子を見て昌秋は身体をゆっくりと移動させて雑鬼達から離れた場所に移動する。

グアアアアアアと再び雄たけびを上げながら襲い掛かってくる。

「くつ・・・・禁！・・・」

昌秋は先ほどと同じように術行使するが、妖も同じ手はくわないと言わんばかりに妖の体に当たる前に後ろに飛び上がつてよけた。

その瞬間昌秋は妖の四肢を拘束する

「縛縛縛、不動縛！！」

昌秋は相手の身が固まって動かなくなつたのを見逃さず続けて攻撃術を放つ

「オンアビラウンキヤンシャラクタン ！！」

昌秋が放つた真言によってが無数の刃となつて妖に叩きつけられた。

『グッグアアアアアアアア』

その攻撃が決め手となり妖は叫びを上げながら消滅した。

昌秋は念のため辺りに妖気がないか確認してからないとホツ肩の力を抜いた。

ふとそれに昌秋は気付き僅かに苦笑した。

昔ならいざ知らず今世になつてから隠れて鍛錬はしていたが妖を倒すのはこれが始めてだ。

そのため知らず知らず肩に力が入つていたのだ。

昌秋は少し離れた所にいて固まっていた雑鬼を見ると雑鬼はこちらを見たまま呆然と固まつていたが

昌秋が自分達を見ている事に気付いてハツとなつて後ずさつた。

『お・俺達も消すのか?』

「はあ?」

ビクビクしながら聞いてくる雑鬼に昌秋はきょとんとした。

元々陰陽師は妖と敵対者として認識される。たとえさつきは助けてくれたとはいえ自分達も弱い雑鬼とはいえる間にしたら妖には変りはない。

もしかしたら、さつきのやつらと同じように消されるんじゃないか。昔は昌浩や晴明のような人間がいて、自分達を一個人としてみてく
れてたとえ踏みつぶしても怒りはするが消されるなんてことはなか
つた。

それに加えて、今は見鬼の才を持つ人間は格段に減った。

雑鬼達もずっと生きてきたが会ったのも10人も満たない。その人
間も自分達を恐怖の対象でしか見ることはなくすぐに悲鳴を上げて
逃げ出していくだけだった。

ならば陰陽師であり自分達を見る目の前の人間は自分達を消すのだ
ろか。

たとえさつきは助けてもらつたが、自分達は弱いから後回しでも大
丈夫だと思われてもおかしくない。

実際そうなのだから・・・。

一方、昌秋は目の前の雑鬼の言葉が不思議にならない。

雑鬼達はまだ気付いていないのか、『昌浩』時代によく知る雑鬼で
猿鬼、一つ鬼、竜鬼だったのだから。

今まで何度も押しつぶされて怒りを感じても本気で消そうとも思わな
かつた存在に今更消すのか?と聞かれても

はあ?としか返しようがなかった。

だけど、昌秋はふと思い出した。

今は『昌浩』がいた時代でもないし、彼等は自分が『昌浩』だとは知らない。

陰陽術を使ったのだから陰陽師としては認識しているはずだし、妖である彼等は自分が消されるのではと

心配になるのは当然の心理だ。

・・・だが、先ほどの靈力で自分が『昌浩』だと気付かないものだらうか？

念のために靈力がもれないように公園に結界を張っていたとはいえそれは外に出ないようにしているだけであつて中には影響がないはずなんだけどな。

もしかして、あまりにもハプニングに気付かなかつたとか？

昌秋は苦笑をこぼした。

そして雑鬼達の方に足を進めると彼等はやはり恐怖で固まってしまった。

雑鬼ズ（後書き）

ありがとうございました。

嬉し涙

ビクビクしている雑鬼にそんなに俺怖そりにみえるのかなあ？と若干落ち込みながら昌秋は雑鬼達の足元まで来るとその場でしゃがみこむ。

『な、なんだよ？』

強気な態度をとりつとしているがやはりその体は震えているため迫力が欠けている。

昌秋は苦笑を零した。

「そんなに怖がらなくともなにもしないよ・・・」

『ほ、本当か？』

猿鬼が恐々と顔を上げて昌秋を見上げて聞いてくるのに昌秋は頷いた。

それに気が抜けたのかホオツとため息をついて肩の力をぬく猿鬼、一の鬼、竜鬼。

昌秋がなにもしないといったとたん安堵の顔をする彼等は実に素直だ。

雑鬼は時に人間より感情豊かで正直である。

『あ！・・・あのさ！ありがとな！助けてくれて！』

『おう！サンキューな！』

『お前が来なかつたらどうなつてたか！ありがとさん！』

安心して思い出したのか竜鬼が昌秋に嬉しそうに笑つて言つ。

それに思い出したかのように後に2匹も続けて言つてくる。

『ん？ そういえば、この感じ・・なんか懐かしい・・？』

『え？・・・あ、本当になんか懐かしい感じがする？』

『ずっと、昔・・・よく会ってたような・・』

そう突然言つてきた雑鬼ズに昌秋は驚愕した。

まさか、気付いた・・？あの時は仕方がなかつたとはいえ彼等にさえ今まで気付かれなかつた『昌浩』（オレ）の存在に・・？

「・・おまえら・・」

昌秋が呆然と彼等を見ているのに気付かずに猿鬼達はうんうんつと思いつつ思い出そうとがんばっている。

『・・あ、ああ――思い出した思い出した――』

『お、思い出したのか！？何だ何だ！？』

『ほひ、孫だよ……孫……昌浩だ！』

昌秋は信じられないと呟つと同時に胸がつまり思いがした・・。

気付いた・・気付いてくれた。この世ではもう誰も気が付かれることもなくそう思っていたのに・・。

気付いてくれるやつが・・・いた。

涙が出そうになつた・・。

「つ……」

『な？・そうだろー・なーお前昌浩だひつー・』

『本当に孫か！？』

『そ
う
な
の
か
？
な
あ
孫
！
？』

顔を突き出して聞いてくる猿鬼達に昌秋は言葉に詰まつた。

• • • • • • • • • • • • • • • •

孫！

「……………んで…………こんな時まで…………孫…………言ひな…………

L

昌秋は胸に詰まつて言葉が詰まつていた。

それは自分を気付いてくれた嬉しさだつたり、覚えていてくれた感謝の心だつたり、懐かしさだつたり様々な感情が溢れ出しそうだつた。

ただ、言葉が胸に詰まつて・・泣きそうだった・・。

畠秋はしゃがみこんだまま、あふれ出しそうな涙を歯を食こしじばつて押さえ込むとするが、

それは適わはず田をしゃむつとつぶつた。

『やつぱつ孫だ！···べつた？泣いているのか？』

三回せわふとととして顔を見合せた。

『おい、孫？どうかしたのか？』

「···ぐ···ぐ···ぐ···」

その場にじざめりへり畠秋の押し殺したかのような声が響いた。

嬉しう（後書き）

あつがとひづやこめした。

ようやく昌秋が落ち着き顔を上げると困ったよつて昌秋を見るある
三四郎がいた。

『だ、大丈夫か?』

昌秋は小さく頷いた。

「うん。 … ありがとう」

ありがとうございます。俺に気付いてくれて。

その感謝の言葉は心配してくれてあるがひとつ同時に覚えていく
れて、見つけてくれた感謝の思いから出た言葉だった。

『おうよーー』

三四郎は嬉しそうに笑う。それからあーと思いつ出したよつな顔をした。

『なあなあなあーお前昌浩だらー?』

『そりだそりだ! なあそりだよなー?』

『久しぶりだなあ』

三四郎は昌秋の顔を下から覗き込みながら言つ。

昌秋はそれにどう答えよつか一瞬迷う。だけど気付いてくれたこい
つらを騙したくはないし泣いてしまった手前ちがうとはいえないと

思つた。

「…うん。久しづり、猿鬼、一つ鬼、竜鬼」

そう昌秋が言ひと二匹は本当に嬉しそうに笑つた。

彼等にとつて『昌浩』やあの時代はなによりも楽しかつた時であり大切な思い出でもあつた。

そして、彼等がいなくなつた時から自分達の『名』を呼んでくれる人間はいなかつたため

またこうして知つてゐる人間に『昌浩』に会えてまた自分達を見てくれて宝である『名』を呼んでくれる昌秋がいてくれることは嬉しかつたのだ。

『やつぱりそらだよな！本当に久しづりだな～』

『元氣してたか？』

『なに言つてんだよ。昌浩は死んだんだぞ？』

上から猿鬼、一つ鬼、竜鬼である。

三四は顔を見合は怪訝に首をかしげた、それに昌秋は苦笑をこぼした。

「生まれ変わつたんだよ。今の俺の名は『昌浩』じゃない

今の俺の名は『安倍昌秋』だ。

そう答えた昌秋に三四はキヨトンとしてついで得心がいつたよつて笑う。

『そつか』

『生まれ変わつてたんだな』

『じゃあまたよろしくなー昌秋ー』

彼等は妖であるし、昔から陰陽師が身近にいたせいか元から知っているのか『生まれ変わり』といつ事には得に疑問に思うこともなく受け入れたようだ。

昌秋はフツと笑つた。

昔、ずっと『昌浩』が潰されていた時は『孫』としか呼ばなかつたのに阿神の事件があつて以来彼等は孫ではなくちゃんとした名前を呼ぶよつになつた。…彼等の中でどうこう基準で変わるのかは昔物の怪達によつて知つたがそれは生まれ変わつても健在らしい。

「うん。…よろしく」

昌秋も久しぶりの彼等に会えた事はうれしい。
だけど疑問に思う事は色々ある。

ただの雑鬼である彼等がよくこの時代まで彼等がよく生きていたなとか今までどこにいたのかだとか。
それに自分の事を黙つていってもらわねければならない。

昌秋は真剣な顔をして足元にいる三四に聞く。

「聞きたいことがある。…お前等に今までどにいたんだ?」

あの時代から今の時代まで何百年、何千年とたつていてる。

その時代の中、よく生きていたな

妖は元々長寿だ。長寿といつたら違和感があるが、長寿だ。

昌秋の真剣な様子につられたように真剣な顔で聞いていた三五は一ツと笑った。

『俺たち妖だからな！これくらいの年月じつて事ない！まあ、殆どのやつが時代の流れの中でいなくなっちゃったが、俺たちは昔お姫が安倍邸に誰かがきた時に一時的に住んでたあの邸にいたんだ！！』

「あの邸に？」

昌秋は驚愕に目を見開いた。

『おうよー！あそこにいたんだ』

妖は弱い。だけど命を脅かすものがないとここまで長生きできるものなのか…。

昌秋は感慨深いものを感じた。
だけどそれ以上に嬉しかった。

自分を知っている存在がたとえ妖だとしてもこんなにも嬉しいものだ。

後書き（あらわし）

あつがとひづりやこめした。

雑鬼に頼み入る。

『昌秋お前なんでこりんなとこるんだ?』

『ここの辺に住んでるのか?』

『でも、今まで見たことないぞ?』

相次いで聞いてくる三匹の話を苦笑氣味に聞いていた昌秋だが、そこでふと一つ鬼はきょろきょろと周りを見回して何かを探しているのに気が付いた。

『……なあ 昌浩一』

「どうした?」

『式神はいないのか?』

昌秋は息を詰めた。

それは昌秋が己の中にずっとしまい込んでいる質問だ。

何故いない? 常にずっと傍にいたあの白い物の怪の姿も他の神将の姿ももう…今はいない。

もう一度とあの頃のよひに変わらず傍りで存在を感じじる事はできない…。

浩秋が近くにいたのならその存在を確認する事はまだできる。だけどそれはちがう。…心がちがつ、と悲鳴を上げる。

彼等の心は彼等にとって今の主である『晴人』や『昌浩』の生まれ

代わりである『浩秋』に向いている。

自分は、ただ主の「血縁者」ただそれだけの存在だ。確かに大切に思われているとは思う。だけどそれは血縁者といい存在だからで、「昌浩」という

存在ではない。それは今は浩秋に向いているのだから。

つらい。ならば本当の事を話せばいい。第三者なら簡単に答えを出せかも知れない。

だけど、それすらも出来ない。……浩秋は大切な双子の弟であり、大切な家族だ。

浩秋を悲しませたく、困らせたくない。それに晴人や神将、家族にも困らせて迷惑かける。

それだけはしたくない。そう決めたのは昌秋本人だ。それを覆つむりはない。

昌秋は家族が大好きだ。そんな家族をそんな思いをさせたくない。だったらこのまま何も言わず平穀に暮らしたらいい。幸いこの時代は妖はない。

力を求められる事も少ない。

もしあつたとしても窮屈のような強い妖がそうそう出てくることは恐らない。

母体の中で浩秋を昌秋の『昌浩』の靈力で包み込んでたためかある程度の「靈力」は

浩秋の中に備わっている。それでなんとかなるはずだし、神将がいるし晴人もいる

そう簡単にやられはしない。

それに…もし、もしそんな妖が現れたのだとしたら…。彼等に危険が及びそうになる存在だったなら…。

彼等が見つけるよりも先に昌秋が先に見つけて退けるつもりだ。

…」の命。消えることにならうとも。彼等に危害を加えることは許さない。

《お……い？……昌秋？》

昌秋ははつとして三匹を見た。彼等は少し恐々と昌秋を見上げていた。

昌秋は深呼吸した。どうやら深く考えこみすぎて知らぬ間に怖い顔をしていたらしい。

《どうした？なんかあつたのか？》

「いや、なんでもないよ」

ホツと息をつく彼等に昌秋は彼等を怖がりせってしまったことに反省した。

「彼等はいない。……いや、家にはいるが俺を傍にいることはもうないと言えるかな」

困ったように叫ぶ昌秋に顔を合わせる。

《どうして？」とだ？？」

昌秋はもう一度深呼吸をして彼等と向き合つ。
そして、頼みがある。という昌秋に疑問を顔に浮かべる。

「…神将やじい様、家族達…いや、誰にも俺が「昌浩」だと云ふことは黙つといてくれないか。」

『……それはなんですか聞いていいか?』

「……お前達以外、俺が「昌浩」だという事を知らない。そして俺は「」のまま言つつもりはない」

三四五はそれに目を剥いた。

『な、なんでだよ!…だつて昌秋が「昌浩」なにになんで…?』

「……俺の双子の弟の浩秋が「昌浩」だと酔は思つているんだ。それを俺がそうだと言つたら家族を皆を困らせる。……俺は彼等を困らせたくないんだよ」

昌秋の言葉に元無言になる三四五

『……だつて、それじゃあ昌秋は…お前はつらへないのかよつ…!…だつてずっと傍にいた奴に勘違いされて傍にいられないなんて…』

昌秋は悲しそうに笑う。

「姿が見えない訳じゃない。会えない訳でも話せないわけでもない。家に帰れば彼等がいる。俺の傍にいなくともじい様や浩秋の近くにいるんだ。…だからそれでいい。」

『そんない、昌秋〜〜〜!〜』

三四五の声は涙声になっていた。それは悲しい顔をする昌秋の姿を見たから。なにより昔の彼等をずっと知っているから…。

泣きながら言つ彼等に昌秋は困つたよつにだけビ嬌しあづて傳へ笑う。

そしてポンポンと二匹の頭を叩いた。

「ありがとう。お前達が俺を知ってくれている。それだけで俺はいい…」

『『『うわ～ん…～昌秋～…』』』

えぐえぐと泣きながら昌秋にすがりついてくる二匹の姿に昌秋は心に暖かくなつた。

雜鬼に頼みゝる。 (後書き)

ありがとうございます!!

帰り道

時間は深夜の3時。

あの後泣き止んだ雑鬼に今後のことを持むと、彼等はまだ僅かに涙声で誰にもいわないと約束してくれた。それだけでなく、他にも手伝いがあるならいつでも頼つてくれよーと言つてくれた。

それは昌秋にとってありがたいことだった。

このまま誰にもバレることなく平穏に過ごしていくつもりだったが、今は気になることがある。

雑鬼達を襲つた妖だ。あんな妖この時代で見たのは始めてだつた。あの妖がどこからきたのかどこかにずっと隠れていたのかはわからないが、このままにしておけない。

あの一匹だったらしいが、他にもいるとしたら不味い。

ただでさえこの時代の人は妖など見たことない人ばかりだ。いたとしても一握りぐらいだろう。

そんな妖がこんな街中でしかも子供達が遊ぶ公園に現れたのだもし他にもいたとしたら町中が大混乱に陥る。そうなつたらもちろん裏の仕事としている安倍家に話がくるだろう。

今回のやつはそんなに強い奴じやなかつたから浩秋でも退ける事も出来るだろう。

だけど、もしもっと強いやつが現れたら……？

そう考へるとほつとけない。だから念のために明日から夜警の日数を増やそうと

考へている矢先の時に雑鬼達の言葉だつたから正直ありがたかつた。雑鬼達には何か異変があつたらすぐに知らせるようにと頼んだから何かあればすぐに知らせてくれるだとう。もちろん人には見つからないようにだが。

昌秋も夜警はやつていいが晴人や神将がいる家だ。そう毎日つまくいくとは限らないからそのほうが助かるのが本音だった。

家が近づいてくると昌秋は家の周りの気配を探る。

神将や晴人の気配はない。

それを確認すると昌秋は来たときと同じく門の上の方まで伸びている木の枝にぶらさがりそつと自分の部屋の窓に足を掛けて中に入つていいく。

トソッと足に地をつけるとホツとした。

そして窓をしめるときつたと靴と外套を脱ぎクローゼットの奥に直すと、ベットに入る。

机の時計を見るともう時計の針は夜中の3時半を示していた。

今から寝たらまだ寝る時間はあるな。そう思いつつやはり久しづりの戦闘で疲れがでたのか

いつの間に眠気が襲ってきて気が付けば眠っていた。

帰り道（後書き）

ありがとうございました。
今回はちょっと短めです。

懐かしき光景

翌朝。目覚ましの音楽できつちり目を覚ました昌秋は着替えるとすぐリビングに下りた。

昔は物の怪が傍にいたし一緒に寝ていることも珍しくなかつたから朝になって目が覚めなかつたときも物の怪が起こしてくれた。だけど今の時代そつはいかない。傍に物の怪がいないし自分で起きるしかない。

だけど目覚まし時計というのがあるこの時代にはさほど苦労はしなかつた。

リビングに入るとそこには晴人と父の昌人、母の秋菜がいた。

おはようと挨拶をする昌秋に三人のあいさつが返る。

その後、食事を昌秋が朝食を済まして学校の準備をしていると昌人が会社にいく時間になつていた。

「じゃあ、俺は行つてきます」

「ええ。いつてらつしゃい」

そういうて玄関に向かうためにリビングを出ると母の秋菜がちらりと階段を見て困ったようにいつ。

「浩秋はまだ寝ているのかしら？」

同じよつて一階を見る昌人も仕方がないといつよつと言つ。

「たく、しかたがないやつだな浩秋は」

「浩秋は昔からああじゅな」

晴人が昌人達のところにいき呆れたように言った。

「昌秋、悪いけど浩秋を起こしてきてくれないかしら？」

困ったようにいう秋菜に昌秋は笑う。

「うん。わかった」

「お願いね」

昌秋は浩秋を起こすために一階に上がつていった。

一階に上ると浩秋の部屋の前で足を止める昌秋は深呼吸をした。
この部屋に入り姿を見るのに覚悟をした。

浩秋の部屋には常にそばにいる物の怪の姿がある。

平安の時代、物の怪の傍にいたのは自分だった。そしてこれから見る姿は

昔の自分の姿だ。昔は自分が朝、出仕するために起きなければならないのに夜警の

疲れで起きれなかつたときは物の怪に起こされていた。

今はもうあのときじゃないけれどそれと似たような状態の今それを見る覚悟をしなければ

ならない。…動搖しないように覚悟を。

「浩秋、入るよ」

ノックをして返事がないのを確認して静かに入る。
そして中に入つてみた光景を静かに見つめる。
懐かしさが込み上げた。昔の自分達を見ていたようにダブつて見えた。

「おひ。 昌秋おまけひさん」

物の怪が昌秋に声を掛けてきた事ではつと我に返る昌秋。

内心で息を吐くと部屋の中を見ると浩秋がベットで寝ていて、その横に物の怪が浩秋の頬つぺたを叩いていた。

「おい！浩秋！…起きろー…おい、浩秋！…」

その内、浩秋の瞼がゆっくりと震えた。

「ん…ん…あ…もつくん、おはよ」

「おはよ。じゃねえよー…昌秋がお前を起こしにきてくれたんだぞ！
お前がグース力寝てるから！」

「ん…昌秋？」

浩秋が戸の方を見ると昌秋がこちらを見て苦笑をしている姿があつ

た。

「あ～… わせよ！」

ふあ～とあぐいをしながら起き上がる浩秋に傍り立てる物の怪はあ～とため息をだした。

「ほらーはやく起きて下にドンボルネー。」

「あ～… 今何時？」

ゆりくじとベットから起き上ると時計を探す浩秋に物の怪はまづいつ一時計を突き出しそ。

「7時50分だ！！」

家を出るの8時よりつい。これからだと着替えて朝食をゆりくじしている暇はない。

急がないと遅刻確定だ。

それを聞いた浩秋は一瞬で田が覚めた。

「え…え……………遅刻するじゃん…。」

バタバタバタとそれはもつそんな効果音が聞こえてきそつな感じで急いで用意をする浩秋。

「なんでもつと早く起こしてくれないんだよーーー。」

「馬鹿かーー俺はずつと起こしてたぞー？その前に自分で起きよ

「うと努力しろー。」

わ～！～もつもつくんの馬鹿～！！

叫びながらも急いで着替えて鞄に教科書などをつめる浩秋。

「つたぐ。…昌秋悪かったな。すぐに行くからお前は先にじつてろ」

戸の前に呆然と突っ立つて居る昌秋に向ひ物の怪に昌秋はそう返すと部屋を出た。

「あ……うん。じゃあ後でね」

「おひ」

「…ひ」

パタンと戸を開じた昌秋はグッともすればもれそつになる感情をかみ殺した。

ははは…覚悟はしていたつもりだけど、もつくんの姿を見ると…。

「…やつぱつ、キツいなあ…」

思わず動搖してしまった昌秋はそのまま戸を開いて戻りながら戸を開く。

自分の中の動搖を押し隠して戸を開いた昌秋はゆっくつと階下へ下りていった。

懐かしき光景（後書き）

ありがとうございました！！
感想くれたら嬉しいです！

宿命の相手

翌日の放課後。

いつものように下校して、彰菜を家まで送り届けると昌秋はちよつと学校に忘れ物をした。

と浩秋を先に帰るように言つて一人道を戻つた。

その際、物の怪や浩秋にめずらしそうな顔をされた。普段、忘れ物などは殆どしない昌秋のため不思議に思つたらしい。

そんな一人と1匹に笑つて誤魔化して、来た道を引き返した。

昌秋が向かつた先は隣町の学校の少し離れた所にある一軒家だつた。そこはもうかなり前から誰も住んでおらず年月もたつているのか扉は壊れているし、中も蜘蛛の巣が張つてあってあちこちがボロボロの家だつた。

こういう人間が誰もいない家は昔から雑鬼達が好む家である。

雑鬼達がいつからいるのかわからないが、この家は昔から有名な心靈スポットらしい。

それを聞くだけれど雑鬼が昔からいるのがわかる。

ガタンとその家に入るともう古いため衝立がわるいのが玄関のドアが簡単に開いた。

キーとゆっくり開いた扉をくぐり、足を進める昌秋に向かういくつもの視線があつた。

『ひそひそ…』

『誰だあれ』

『人間だ…ここに人間がくるのはいついらうだらうな』

『どうする？どうする？』

昌秋の耳にいくつもの声が聞こえた。その声はた楽しそうな声だった。
もちろん昌秋には全て聞こえないとため内心苦笑を零しつつ足を
止めた。

『お、とまつたぞ？』

『まさか俺達の声が聞こえているのか？』

『まさか、昔とちがつて今は聞こえるやつなんか滅多にないぞ？』

昌秋はフツと笑つて声が聞こえている方を見た。

「…悪いけど、全部ちゃんと聞こえてるから」

そこには数匹の雑鬼達が昌秋の方を見ていた。
昌秋が自分達を見ているのに気付いた彼等は驚愕に目を見開いてい
る。

『『お前俺達が見えるのか！？』』

ボトボトボトと屋根から落ちてくる雑鬼達。

「ああ…」

『ああああああ！－昌秋－！』

その時、部屋の奥から猿鬼、一つ鬼、竜鬼が走って来た。

『なんだあ？お前達の知り合いかあ？』

一匹の雑鬼が走ってきた三匹に言つ。

『あ！もしかして昨日言つてた昌秋つてあんたのことか？』

『ああ！あの！』

『ほひ、あんさんがそうかい』

雑鬼達はジーと好奇心旺盛な目で昌秋を見ている。

昌秋は思つた。雑鬼共よ、一体どんな説明をしたんだ。

「……とにかく、今日はあまり時間がないんだ。昨日の様子を聞きたいんだけど？」

聞きたいことはあるが今は時間がない。早く聞いて帰らないと怪しまれるかもしねえ。

それは避けたい。

『昨日か？得になんにもなかつたぞ？』

『ああ！平和そのものだつた！－』

「… そ、うか、な、ら、い、」

ホツと息を吐く畠秋だつたが一匹の雑鬼が『あ、でも…』つと何かをいいかけた。

「な、に？ なんかあつたのか！？』

『え… あ、いや、や、の』

その雑鬼の言葉にその雑鬼に向き直り聞く畠秋に『せわかビックリしたかのように言葉を濁す雑鬼に畠秋ははつとする。』

「あ、悪、い…」

『あ、いや別にいいけどよ』

畠秋はハーと息を吐いた。

「それで？」

『俺もはつきり見た訳じゃないんだけどな…なんか嫌な気配がしたんだ…。そんですぐそこから離れたんだけど…その時声が聞こえたんだ』

「声？」

『ああ…ちゃんと聞いたわけじゃないからはつきりはわからないが…なんか「安倍畠浩」って…言つてた。…なあ？ それってお前の事じやないのか？』

「…………それは妖か？」

『ああ。たぶんそうだと思つたけど……』

昌秋はジッと考えこんだ。

俺を……「昌浩」を知つてゐる?でも妖で俺を知つてゐるやつなんて……。

昌浩と言つたつて事は前世関係か。

だけど妖で知つてゐるやつなんてそんなにいない筈だけどな……。

「他になんかいってなかつたか?」

『うーん……えっと……せつき……がどうの言つてたような』

ドクンッと心臓が脈打つた。

「殺鬼だつて!?」

殺鬼。それは「昌浩」が亡くなるきっかけを作つた妖。

平安の時代。

ある貴族が出仕の帰りに何者かに攫われ数日後に遺体となつて発見された。

さらに数日後、同じような事件が何件も続けてあつたため陰陽師で安倍晴明の後継である昌浩に声がかかつた。昌浩が調べて結果。妖で人間を襲い、人の命の源を吸つて妖力を増幅してゐる事が判明。

昌浩と神将達が退治しよつ乗り出し、部下の妖を神将に頼みながらも昌浩は戦つたが、相手が思つたよりも強く、ギリギリまで妖を追い詰めたが最後のどめを指す力が昌浩には残つていなかつた。そのため封印をするのがやつとだつた。その時の傷が元で昌浩は死んだのだ。

その殺鬼の封印が解けた。

そういう事か…。だが一体誰が?

『…い?…おい!昌秋!』

昌秋ははつとした。

「あ…」めん。「

『大丈夫か?』

「あ、ああ

昔の、あの時昌浩が死ぬ原因となつた脇腹がドクンドクンとまるで脈打つかのように感じる。もうそこには傷など無いのに…。

昌秋は深く息を吐き深呼吸をする。氣のせいだ。もつ傷などない。これは魂の記憶が感じている幻だ。

氣付くとだいぶ時間がたつっていた。

そろそろ帰らないと…。

昌秋は情報をくれた彼等に礼をするとその家を出て帰り道を急ぐ。

「殺鬼」俺が…昌浩が戦うべき相手。昔の昌浩でさえ死に追いやるきつかけを作った妖。

この平和な時代に生きている浩秋には無理。神将がいたとしても下手をしたら死ぬ。

そんな事はさせない！

元々俺があの時倒さずに封印をしたことが原因。いくら体力も靈力も限界に来ていたとはいって倒すべきだった存在。

あいつは……俺が、倒す！！

夕焼けが紅く空を染めていた。

それは物の怪の瞳と同じ色。とても懐かしく優しい色をしていた。その色を見ながら昌浩は心に決意を新にした。

宿命の相手（後書き）

ありがとうございました。

封印塚

あの日から数日たつた。

夜警も神将の目を盗んで部屋に自分に似せた式を残してしている。だが、いつまで持つかわからない。もし晴人に見つかったらアウトだ。

雑鬼にもなにかあればすぐに知らせるように言つている。

あれから数日たつた今日まで妖が出ることもなく平和にすごしているが、奴が出てきているのだとしたら安心はできないのだ。

今日は日曜日、学校は休み。昌秋は少し出かけてると両親に言つて昔、奴を封印した場所に行つてみることにした。

そこは昔は大きな河だったが、今はもうその河もなく広い道路となつていた。

そこを昌秋は周りを見回しながら歩く。昌秋はその道路の橋にある信号のすぐ後ろにある大きな木が生え伸びておりその木の葉が僅かに信号の明りを隠すか隠さないかぐらいになつていた。

その木の後ろ側に何かあるのを見た。

その場所に行き木の後ろを覗き込むとそこには元は塚か何かがあつたようだが今はもう壊されていた。

その塚らしきものの直ぐ傍に木の看板が落ちていた。それを見るとそこにはかなりが年月がたつていてある「封印塚」と書いてあつた。

「……これは……」

昌秋は塚の前にしゃがみ込んでその中を除き込むと木箱があった。その木箱には昌秋は見覚えがあった。これは……昌浩が殺鬼を封印した札を木箱に納めさらに封印札で一重に封印した箱であった。

その証拠にその木箱には敗れた札が張り巡らされていた。

その木箱の蓋には大きな丸い穴が開いており、そこに手を翳すと僅かに妖氣を感じた。

この妖氣は……殺鬼の……。

やはり封印は解けていた……。

「だけど……なんで？」

封印を施してからからりの年月がたっているとはいえ頑丈に施した封印がそう簡単に解けるとは思えない。……ならば何者かが封印を解いたか？奴の仲間か？

色々疑問は残るか奴の封印が解けたのは確実のようだ。

早く、見つけ出して倒さないと……また関係のない人間を犠牲にしてしつまも知れない！！

昌秋はグッと拳を握るとそこから離れて奴を探すべく走り出した。

封印塚（後書き）

あつがとひるぎやこめした。

浩秋、出動。

翌日の夕方、夕飯を済まして部屋に戻る途中で浩秋に呼ばれた。

「昌秋！」

「どうかした浩秋？」

自分の部屋の前で浩秋を振り返ると浩秋は少し怒ったような顔をしながらこちらに来た。足元にいる物の怪は呆れた顔をしていた。
…どうしたんだう？

「…うよつと聞いてよ昌秋！…」

昌秋に怒りをぶつけようとした浩秋に昌秋は笑う。

「いいよ。部屋で聞くから入って」

そういうって部屋に入れると浩秋はそのままベットに座った。
物の怪はベットの足元で座った。

「どうしたの？」

「聞いてよーわしき急にじい様に呼ばれたからいつたらーなんて言つたと思つー？」「今日からお前ちと夜警行つてーだよー」

「く…へえー」

…じい様。昔とまるつきつ同じじーとしてるんだ…

昔もよく、まるでちよつとそこまで買い物に行つてこい。みたいなノリで妖退治をさせられてたな……。

と晴秋はどこか遠い目をしながら聞いてた。

「一体何考へてるのかわからぬよ！夜だよ夜！しかも夜中に！」

「お前なあー、昔は夜警なんて珍しくもなかつただろ！」

物の怪が思わずといったように口を挟んでくるがそれに浩秋がキツと物の怪を睨む。

「だから、俺にはそんな記憶はないっていつてるじゃないか！！それに今は昔と違つて夜に俺みたいな未成年が歩いてるのみつかつたら下手したら補導されるじゃないか！」

確かに昔は外灯なんてついてないから今みたいに明るくもないし、歩いていたからって補導されるような心配は殆どなかつた。だが、もしあつたとしてもあの晴明がそう簡単にあきらめるなんて事はなかつただろう。

「そんなの自力でなんとかしろ。晴人なら絶対そうする。それに浩秋忘れてないか？」

晴人がお前に夜警をしろつていつたのは今日の朝方に出了妖を探して退治するためだ。

後継のお前がいかなくてどうする？」

「だから俺はっ」

後継なんて知らない。そい言ひたかったが物の怪のその真つ直ぐな目にいえない。

昌秋は妖が出たという新たな情報に目を見開いた。

「つー…朝方？」

朝方、と言った。昨日夜警からかえってきたのは大体3時半頃。恐らく現れたのはその後なのだろう。

息を呑んだ事はバレなかつたよつで聞き返した昌秋に浩秋と物の怪が目を向けた。

「そうだよ！ 妖だよ！ ？ しかも人一人襲われてるんだよ！ ？ 幸いその人はなんとか逃げて無事だつたらしいけど…。そんな奴に今まで殆ど妖なんて退治した事ない俺に行き成りそんな事言われても出来るはずない！ ねえ！ 昌秋もそう思うよね！ ？」

物の怪はそう行つて昌秋に詰め寄る浩秋がいるベットに乗つて浩秋の方を向いた。

「浩秋。いいか。確かに今のお前は妖を退じた事はない。だが、お前は『昌浩』だ。昔は数え切れないほどの人に危害を与える妖をお前は退治してきた。だからお前なら出来るはずだ。現に晴人は最初の内から妖退治をしていた。」

「それはじい様に前世の記憶があつたからで、俺にはないの…！ そんなの出来るはずがないよ…！」

「だつたらさつさと思ひ出せ…！ そしてちやつちやつと妖退治を済まばいい事だ…！」

「無理言わないでよ……」

確かにそれは無理だ。何故なら浩秋は昌浩ではないのだから。

二人は睨み合っているが、忘れていないだろ？　ここは昌秋の部屋である。

この部屋の主である昌秋はその二人を寂しそうな瞳で見ていた。

「あー！　わかった分かったよ！　行けばいいんだろ！　行けば！　でも妖がいなかつたらすぐ帰るからな！　もしいたとしても無理だと思つたら俺即逃げるからな！」

しばらく言い合いが続けっていたが、浩秋がそういう。物の怪は呆れたように浩秋を見るが浩秋はそれをもう覆すつもりはないようで物の怪の視線を無視して返した。

「…………浩秋。」

収まつたのを見計らつて昌秋が声をかけると二人ははつとしたようになに昌秋を見た。

完全にここがどこだか忘れていたようだ。

「あ……ごめん。」

昌秋は苦笑をこぼす。

「いや、それより浩秋、そろそろ行つたほうがいいんじゃないかな？」
あまり遅くなると本当に夜中になるよ？」

「え！？」

浩秋が時計を見ると時刻は10時を回っていた。

「うわっ！ 本當だ。じゃあ、昌秋行つてくる！ … 行くぞもっくん
！」

そうこうと走つていった。

「もっくん言うな！ 晴人の孫！！」

「孫孫孫言うな！」

そういうながら掛けていく姿を昌秋はボーと見ていた。
その瞳に悲しさを宿しながら…。

そして奴が現れ、そして浩秋達が夜警に行くことがわかつた今、急
がないといけない。と
焦りが出てきた昌秋だった。

妖と鉢合わせ

夜、12時を過ぎた頃、昌秋はいつものように外套を身につけると家を後にする。

今日から浩秋と物の怪が夜警を始めているからいつも以上に気をつけないといつどこの会うかわからない。

昌秋は気配を断ちながら周りに警戒をしながらゆっくりと足を進めていた。

昨日現れてた妖は奴なのだろうか？襲われた人は無事だったみたいだけど…。

殺鬼に襲われて逃げれるなんて在りえるだろうか？いや、昔も始めた内は無事の人もいたけど回を重なる事にやつから逃げれる人間はいなくなつた。

…もしかして封印が解けたばかりで体力が完全じゃない…？

…どちらにしても昨日の奴が殺鬼と関係あるのならば今日も何かしら起じる可能性がある。

その時背中がゾッとした何かが走り抜けた。そして明るく照らしていた外灯がバチバチバチと点滅する。

昌秋ははつした。

「・・・つー？」

この感じは知っている。これは妖氣だ。しかも邪氣をはらんでいる。

昌秋はバツッと妖氣を感じた方を向いた。そこには闇があった。

昌秋がいる辺りはバチバチと点滅しながらも外灯がついているにも関らずそこには何もなくただ闇が存在していた。

「……何者だ！？」

息を呑み誰何をする昌秋にその闇に蠢く存在はゆっくりと動いた。動いた事で昌秋側にあつた外灯の光が届きはその存在を露にした。そいつは闇のような真っ黒い毛むくじやらな大きな体にその顔はイノシシの顔、口は一本の牙。さらに手は鋭い爪が伸びていた。

『……人間。……極上の獲物……』

それは靈力のことを言つてゐるのかそれとも人間そのものを指しているのかはわからないがただ分かることはこれは妖である、

……やはり、いた。こんな奴に浩秋と戦わせるにはいかない！

「もう一度聞く。何者だ？朝方に人を襲つたのはお前か！？」

これは奴……「殺鬼」ではない。だが、この気配は奴と似ている。

『クククク……貴様のような力の強い人間は久しぶりだなあ』

「答える……！」

『ああ……そうさ人間を襲つてやつた！だが惜しいことに逃げられち
まつた。……だが！

今日はそうはいない！！またとない極上の獲物！貴様は逃がさない
俺が食つてやる！ありがたく思え！！』

グワアアアアアアと襲い掛かってくる妖に昌秋は後ろに飛んで避ける。飛んで避けた昌秋は先ほどまでいた場所を見るところには鋭い爪を地面が抉り取つてそこはボコッとへこんでいた。

その時風にながれてくる神氣にはつとした。

これは紅蓮の…。

この神氣は普段は優しく暖かいが今は持ち主の感情に影響されてるかのように鋭く怒りを纏つっていた。

「…つ…！」

まさか、浩秋に何かあつたのか！？

「お前のほかにもいるのか！？」

目の前の妖は地面から手を抜き、ニヤリと笑つた。
それが答えた。こいつのほかにもいる。

「くそつ！」

昌秋は今にも駆けつけたい心境に駆られた。だが目の前にいるこいつをこのまま放置しとくわけにはいかない！
ならば、退いた後ですぐ駆けつけるしかない！

『ガアアアアアアアアア』

昌秋は素早く真言を唱える。

「オン、ディバヤキシヤ、バンダバンダ、カカカ、ソワカ　！！」

『ガツ！』

その真言によつて動きを縛られた妖の体は冒秋の顔から数センチと
いう所で固まつた。

昌秋は冷や汗を咲きながら数歩下がる。

「...この術は凶悪を断却し、不詳（祥）を祓（払）除す
...万魔拵
服、急々如律令　—！！！」

風とは別の波動が湧き上がり、轟音を伴つて相手に叩きつけられる。まるで見えない雷光のように、それは相手を切り裂き貫き、放たれる妖気を浄化する。

妖が完全に消滅した事を確認した昌秋はほつと力を抜くがほつとして急いで紅蓮の神氣を感じた場所に向かつて走り出した。

孫といつ意味

昌秋が妖と対峙する少し前。

浩秋と物の怪は晴人の命令で夜警に出たが特に変わった様子もなく歩いていた。

「あーよかつた。なにもなくて。」

「うれしそうだな？」

物の怪の言葉に、ギクッと肩を震わせる昌秋に物の怪はため息をつく。

「そ、それはうれしいに決まってるだろ！？ 何もないつて事は平和の証拠なんだから！」

「まあ、それはそうだが。何もないって訳ではないだろ。現に昨日妖が出てるんだから。そのための夜警だしな」

「それはわかってるけど…」

「なら、安心してないで、ちゃんと警戒しとけよ。晴人の孫！」

浩秋はムツとした。

「だから孫って言つなつていつも言つてゐるだろつー。」

「孫を孫つて言つてなにが悪い？」

「そ、それはそうだけど…俺は安倍浩秋つて名前があつて孫つて名前じやないんだぞ！？」

それに孫つて言つなら昌秋だつてそりぢやないか！」

物の怪はそれに微妙な顔をする。

「うーん。確かに昌秋も孫には確かになんだが、お前とは少しちがつ。

」

浩秋はそれに怪訝そうに首をかしげる。

「なにがちがうんだよ？」

「…………はあ。もういい。とにかくちがうんだよ」

物の怪はため息をつく。

そんな事、言わなくとも記憶があればわかっている筈だ。昔も昌浩が同じような事を聞いた事がある。

その時はまだ昌浩も押さなかつたしわからなかつたが成長して身体的も精神的にも力も強くなつた昌浩はそれを理解していた筈だ。それにあの事件を切つ掛けに雑鬼達も昌浩を一人前の陰陽師だと認め「昌浩」と呼ぶようになった。それでも物の怪や神将にとつても昌浩は「清明の孫」に変わりはなかつた。

だけど、それもさえ覚えていない浩秋に物の怪は落胆の色を隠せなかつた。

同時に何故思い出せない？早く思い出せ！と浩秋に怒りを感じてしまつた。

まつ。

そして浩秋には何故そんなに落胆するのかなんてわからない。わかるはずがないんだ。

「?? なんだよそれ？」

そのまま物の怪は無言で浩秋の足元で黙つたまま歩いて、浩秋も無言になつた物の怪にわけがわからぬまま黙つたまま歩いた。

「……………ああ……むひつ……」

数分にならうか。しばらくずっと黙つたままただ歩くだけだが、いいかげんこの空氣に耐え切れなくなつた浩秋がついに声を上げる。一応今は夜中なため近所迷惑になるが浩秋の頭の中にはそんな事忘れてしまつている。

「なんなんだよ一体急に黙つちやつてさー?俺なにか言つたー?」

急に声を上げた物の怪は少しバツの悪い顔をする。

「…別」

「全然別にじやないじやんか!?.急に黙つてさー?何?言いたいことがあるなら言えよー?」

物の怪はそんな浩秋の顔を見る。

……わかつてゐるんだ。こんな事浩秋に言つたつて詮無れ!」などいう事は…。

「……はあ。悪い。お前は何もなるくなー。……ただ。」

浩秋は手を腰に当てて物の音を見下ろす。

「ただ。なんだよー?」

「ただ……俺が少し焦つてしまつただナダだ。……悪かった」

「焦つたって何を?」

物の怪はそれに無言で返した。

「……」

浩秋はそれにはあとため息をつく。

「もうここまか。」

「……それよりも浩秋

物の怪は話を変えようと云つ。

「なに?」

「あんまつ声を上げると近所迷惑だと云ひたいを忘れていないか?」

浩秋ははー?と云つたり声を上げるが、云々がどうとか現状を
思いだす。

「あ……」

その時今こる道の端の曲がり角から自転車のライトと人の声が聞こえてきた。

「「ゲツ！！」

思わず道の端に隠れた浩秋達はその曲がり角から来た人物を見るとそこには巡回と最中であろう警察が自転車をころかしながら歩いてきていた。

「…おかしいな。この辺で子供の声が聞こえた気がしたんだが…」

ビクッとする浩秋はドキドキする心臓を落ち着かせながら端に隠れたまま警察が通り過ぎのを待つ。ちなみに物の怪は道の端にはいるが隠れてはいない。普通の人間には物の怪の姿は見えないからだ。

ドキドキ…。

そのまま通りすぎていく警察の姿を確認した浩秋は警察が歩いていった逆の方向に足音を出来るだけ立てないように走つていった。

「はあはあはあ…」

さつきの場所からだいぶ離れた所で足を止めると荒れた息を整えようと深呼吸をする。

「はあー。ビックリしたあ。……もっくん！気付いてたなら言つてよー！」

「だから言つただろ！？」「

「遅いよー。もつと早く言つてよー。」

物の怪はそれにムツとした。

「浩秋もそれぐらー…浩秋ーー！」

氣付け。と言葉を続けよつとしたが、流れてきた妖氣にはつとして浩秋の首元の襟を加えて後ろに飛ぶ。次いでドカアツと破壊音した。

「なつー！？」

先ほどまでいた場所をみるとそこには見たこともない妖が土を抉りとつており浩秋達をニヤリと笑いながら見ていた。

昌浩を知る妖

物の怪が浩秋を下ろすと浩秋は顔を真つ青にして顔を引きつらせた。

「がつ、骸骨———？」

その妖は骸骨の体を持っていた。その大きさは浩秋の背を軽く超え細い体。だがその骨だらけの手は大きくその手の先は鋭く尖っている。

物の怪は田を剣呑に光らせる。

「…浩秋。油断するなよ」

浩秋はぎょっと物の怪を見るが物の怪は妖を睨みつけていた。

「ちょ、冗談だろー？こんな相手できるはずないだりつーーー！」

物の怪の言葉に浩秋が妖を見ると妖はギラギラした田で田分達を見ていた。

それは獲物を狙う目。物の怪のいう通り妖は浩秋達の逃がすつもりは毛頭なかった。

「…う…そだろお」

浩秋は後ずさる。昔からお前は「昌浩」と言われ続けてきた浩秋だが、その力は母体の中できんでいた昌秋（昌浩）の靈力の影響で出た力である。生まれてきてから1~3年なるがそれ以上靈力が上

がることも下がる事もない。だが逆に昌秋は記憶が戻つて力も戻つた。今では昌秋の方が力は強くなっている。浩秋とてそれなりの勉強はしてきたが、平成の世でずっと平和に過ごしてきたまだ13歳の子供だ。

そんな命の関わる戦いなんてしたことなんてない。こんな恐怖を味わった事なんてない。

それなのにいきなりこんな…。

こんな妖と戦うなんて無理だ！！

「浩秋！」

後ずさる浩秋に物の怪が叱咤するよひに叫ぶが、浩秋はその声すら耳にはいっていない。

この目の前にいる妖から逃げる事のみ頭を占めて聞こえていないのだ。

物の怪は浩秋の姿に内心舌打ちをする。

物の怪はたとえ始めに嫌がっていても、記憶が残つていなくとも浩秋は目の前に敵の妖が出れば躊躇わざ出る。そう思っていた。

だけど、それは計算違いだったようだ。ここまで浩秋が動搖して恐怖に支配されるとは考へてもいなかつた。

「ちつ！ 浩秋下がれ！…」

物の怪は浩秋の前に躍り出るとその身を深紅に染め上げる。カツと紅い光とともにそこに表れたのは物の怪の真の姿である十一神将一人凶将騰陀・紅蓮だつた。

「ぐ、紅蓮」

目の前に現れた紅蓮に浩秋ははっと目を見開いて紅蓮を見つめる。紅蓮は前を見据えたまま視線をそらさない。

目の前の妖はニヤリと笑った。

「…昨日、人間を襲つたのはお前か？」

『クケケケケ…ソウダダガオレダケジャナイゼ！』
『なに！？もう一匹いるのか！？』

『ケケケ！サアドウカナア！』

「答える…！」

紅蓮が叫ぶがが妖は笑うだけで答えはない。焦れた紅蓮は手に炎を纏わせた。

「答えぬなら、無理やりにも答えてもらつままで！」

そして目に纏わした炎蛇を妖に放つ。

「オオオオオオオ

妖に向かつて紅蓮の炎蛇は襲い掛かる。

ギシャアアアアアアアア

炎蛇が妖に襲い掛かるがその大きな体で飛び上ると避けた。

「ちひー！」

「デカイくせにすばやい…」。

紅蓮はつぶやきちらりと後ろの浩秋を見るが浩秋は恐怖でがちがちと振るえさせながら固まつたままだつた。

妖の恐怖もあるがやつの妖気に当てられてしまつたようだ。早く浩秋を安全などこに連れて行かないと体が持たない…。

紅蓮は焦つていた。

ドオオオンという破壊音と共に紅蓮がはつとして見ると、妖が地面に足をつけていたがあの巨大の体のせいかそこ足元はそいつを中心にしてボコッつとへこんでいた。

『クケケケケ…ソイツツカイモンニナンネ？ミタイダナ…チカラモソレホドニモナイミタイダガオレガクツテヤロウカ？』

「ふざけるな！こいつは陰陽師だ！貴様など簡単に捻りつぶしてくれる…！」

『ケケケキルモンナラナアアアアア…』

妖はそう言つと一人に襲い掛かつてきた。紅蓮は炎を召還すると炎を放つ！

ギシャアアアアアア…

妖はその骨の喉から叫びを上げる。それが超音波となつて炎をかし消した。

「なにつー？」

『ケケケ……キサマジュウニシンショウトカイウヤツのナカマダロウ？…アベノマサヒロをシッテイルカ？』

紅蓮は目を見開いたそして剣呑に目を光らせる。

「貴様、何者だ！？なぜ昌浩を知つている！？」

妖はクククと喉で笑うのは一ヤリと笑う。

『ホオ、ヤハリキサマガシンショウカア…ケケケジャアソノウシロノーンゲンハアベノマサヒロのホンジャカア？』

紅蓮は妖の視線から浩秋を守るように妖の視線を遮る。

「貴様つー…答える！なぜ昌浩を知つている！？」

だが妖は怪しく笑うだけで答えは返らない。

『ナラバシネヌヌヌヌー！』

二人に再び声の超音波を放つ妖に避けようを紅蓮が浩秋を抱えて避けようとしたその時！！

「オンバサラクウダ、ウジホクウダウンハッタ！」

そのどこからか聞こええて来た声と共に放たれた術が今にも紅蓮達に襲い掛かりそうだった、妖の攻撃とぶつかり大きな破壊音と共に爆発した。

謎の人物

「何つ！？」

妖気と靈気のぶつかりにより大きな爆発がおきその爆風が起きる。紅蓮は浩秋を胸に抱えて後ろを向いて爆風から守る。妖は突然の爆風の勢いで飛ばされはしなかつたが後ろに下がつていた。

「クツ！！」

しばらくして爆風が收まり、その場にいた全員が顔を上げると先ほどの術が放たれた場所に視線をやるとそこには黒い外套を頭からスッポリと被る一人の人間がいた。顔はフードでしつかり隠されているためその顔はわからないが、身長はちょうど浩秋と同じくらいだった。そう、それは外套でわからぬように体を覆つた昌秋の姿だった。

『ナニモノダ！？』

妖が浩秋に誰何を掛けるが昌秋は無言で返す。

昌秋はちらりと紅蓮達を見ると紅蓮はこちらを警戒したように見、そして浩秋も体を震わせながらも呆然とこちらを見ている姿を認めた。

昌秋はやはりと思った。

今まで平和に過ごしていて妖気さえ殆ど感じたことない浩秋がこんな禍々しい妖気を放つ妖と会つたら…と心配していた。

その予想が当たっていたようだ。

早く浩秋を安全な場所に移動させないと浩秋の体が持たない！

《「タエローニングンナーモノダ！？」》

そういういつつ昌秋を警戒する妖に昌秋はスッと印を組み外套でぐぐもつた声で言霊を発動する。

「縛、縛、不動縛！」

《「ぐつ！-！」》

「つー待て！」

それにはつとした紅蓮は思わず叫んだ。

昌秋はそれにピクリと肩を震わせると印を組んだまま紅蓮を見る。

「そいつには聞きたい事があるー！」

紅蓮は妖の動きを止めたまま止まつた謎の人物を確認すると妖に向き直る。

「貴様、何故昌浩を知っている？答えるー！」

昌秋はそれに目を僅かに見開くと妖を見据える。

《「昌浩」を知っている？

…まさかこいつ殺鬼の仲間か？

《「クツ…フ…クツクツクツ…」》

昌秋の術から逃れようと動いていた妖だが、その質問に紅蓮を見る
と突然笑いだした。

一 答えろ！！

『ククク…アベノマサヒロ…ワレラノアルジガサガシテイル…ムカ
シヤツハワガアルジヲフウインシタ、ダガアルジハフツカツシタ！
アルジノイカリハオサマラヌ！アベノマサヒロノタマシイハコノヨ
ニアル、カナラズヤミツケダシアルジニケンジョウスル！ソシテア
ルジはソノタマシイヲソノミニヲクラウノダ！！』

「な・・・なんだと・」

紅蓮は目を見開いたそして剣呑に目を光らせると妖を鋭く睨み付ける。

「そんな事させるのもかー！」

浩秋を背にかばいながら紅蓮の周りに怒りの紅い神気が立ち上り炎が召還されその炎が6つの炎蛇となり妖に攻撃をしかける。

ゴオオオオオオオオオオつと昌秋の術により拘束されている妖は動く事ができずにまともに炎蛇を食らつた。

その様子を見ながら昌秋は目を細めた。

やはり…そういう事か。だとしたら奴は俺を狙つてくる。さつきの妖の言い方だとまだ『俺』がそうだとは気づかれていない。だが、

それも時間の問題か。

「… おい…貴様何者だ！？」

紅蓮の声にはつとなる昌秋はそのまま翻した。

「待て…」

紅蓮は逃がすまいと昌秋を追いすがるが昌秋はそのまま歩き出す。

「おい…」

「ぐ…れん」

そのまま追いかけようとする紅蓮だが、後ろから聞こえてきた弱々しい声にはつとなつて後ろを向くと浩秋は体をまだわずかに震わせながら紅蓮を見上げていた。

「ひ…」

紅蓮はこんなに体を震わしている浩秋を置いてあくこと出来なかつた、

早く浩秋を移動させなれば…。

内心舌打ちをしてもう一度振り返るとそこにはもう誰の姿もなかつた…。

晴人と紅蓮

浩秋を家に連れ帰り部屋に休ませた後、紅蓮はすぐに晴人に向かつた。

「晴人っ！！」

紅蓮が勢いよく晴人の部屋に入ると晴人は机に羅針盤を広げたまま難しい顔をしていた。

「…紅蓮」

紅蓮が入ってきたのを見ると晴人は一度顔を上げて紅蓮を見た。

「…・・・見ていたのだろう。奴は何ものだ！？それにあの妖が言つてたことは・・・」

「あの者が何者かは占で見てみたが詳しい事はなからぬ。ただ我々の敵ではないと出た」

「敵ではない？・・・確かに結果的に俺達は奴に助けられた。だがそれだけで味方だとは思えない」

晴人はうなずいた。

「紅蓮の言う通りはつきり味方だとは今のところわからない。・・・詳しいことがわからぬが今の状況はどうともいえん・・・。だが敵ではないのなら今の所そう警戒せんでもいいじゃろう。
それよりも今はあの妖が言っていた事が気になるの。…あの妖は、」

「昌浩」に封印された主が「昌浩」を探している。と言つた。お前達はそいつを知つてゐるか？」

晴人は知らない。恐らくその時はもういなかつたのだろう。

紅蓮やその話を黙つて聞いていた勾陳、六合は息を呑んだ。
それは彼らにとつてつらい記憶であつた。

「・・・知つてゐる。・・・恐らく妖が言つていた昌浩に封印されたのという妖は「殺鬼」。・・・昌浩が最後に戦つた妖であり・・・そして昌浩が死ぬ原因を作つた妖だ」

勾陳がつぶやくよつと言つた。

それを聞いた晴人は息を呑んだ。そしてそうか・・・と答えたの
だつた。

「・・・わしはもうその時、逝つていたからな。詳しいことを聞か
せてくれんか？」

そうして、ゆつくりと聞いたのだった。

話を聞き終わつた晴人は黙つたまま考え込んだ。

「・・・なるほど・・・ふむ。どういう訳か封印が解けた妖が封印を施した昌浩を恨みその積年の恨みを今世に転生した昌浩・・・浩秋を狙つていると。そういう事か？」

「恐らくは。だが、奴等はまだ浩秋に気付いていないようだ」

晴人は頷いた。

「だが、いつ氣付くかわからん。紅蓮、今以上に浩秋の周りに警戒を頼むぞ。勾陳、六合お前達も頼む。他の者にも伝えてくれ。」

紅蓮、六合、勾陳が頷いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2191s/>

『真実の声を聞き届け！』

2011年8月5日16時11分発行